

# 非文献史料にみる在村文化

房総芭蕉句碑をめぐる情報網と風雅の交流

杉 仁

Village Culture as Seen in Non-literary Materials: Distribution of Monuments with Verses by Basho and the Information Network of Regional Haiku Circles

はじめに

- ① 近世の石碑文化と在村文化
  - ② 建碑・奉額の情報網・意図・事業過程
  - ③ 『杉間集』 届所にみる上総夷隅連の情報網
  - ④ 江戸貴賓文人と在村文人との交流
  - ⑤ 半場里丸と房総の在村文化
- まとめ

## 【論文要旨】

東アジアの非文献資料の一つ碑文は古代中国以来さかんだったが、日本列島では古代・中世と近世とで大きく異なる。古代石碑は数も少なく、国風文化で忘れ去られた観を呈す。中世で五輪塔に梵字（いわば来世文字）も刻まれたが、現世の実名・行為を記す（いわば現世文字）ものは稀だった。板碑には願主名・紀年もみえるが基本的には来世文字の供養塔で、古代・中世の来世主義文化の基本は変わらなかった。

近世、石碑は爆発的にふえた。庶民層まで墓石建立が普及し、現世名（現世行為など）を刻む墓誌形式が一般化した。最大要因は、切支丹禁令による寺請制度であろう（ほか家族制度・仏教儀礼・信仰慣習など）。寺院は非キリシタン証明の場となり、旦那寺は先代の葬式・回忌法会・季節墓参（ほか付届・数珠・持仏壇・香花など）の場、現世文字で俗名・戒名・没年月日・建立者名を刻む墓石の場となった。現世主義文化への転換を一つしめす。

墓石建立とともに、さまざまな建碑活動が盛んになった。寺子屋の普及とともに、寺子たちが師匠顕彰する墓石「筆子塚」も一般化した（房総だけで三三〇余基。川崎喜久男氏）。事績・筆子名・村名も刻印され、在村の教育文化の実体を今に遺した。在村文化でもっとも多い俳諧では芭蕉塚の建立が流行し、房総でも夷隅郡鴨根村清水寺の芭蕉塚と記念句集『杉間集』が多くの史料とともに遺された。参加俳人の分布は、山間無人地をのぞく平野・山間・海岸縁に（まるでリアス式海岸の）海のようにひろがる。その「大分布」いわば房総文化圏のなかに、三千余の筆子塚ごとに筆子の「小分布」（寺子屋通学圏、いわば地域小文化圏）が存立した。

以下、房総俳人の大分布、筆子の小分布、芭蕉塚建立の意図と活動、記念句集の届所、房総・江戸の情報網と町人・旗本屋敷、大名家の貴賓俳人と在村俳人との交流など、俳諧史料と筆子塚史料を総合する視点から、在村文化の実態を一つ提示する。